

「 梅雨の気象現象 」

六月は梅雨の季節。明日六日は二十四節気の芒種で、西日本ではこれから田植えの本番を迎える頃。

雨は象形文字で、「天からあまくだる水滴」を表しており、同じ雨という字でも読み方に大きな意味がある。小雨、春雨、霧雨など「さめ」と読むときは弱い雨を指している。

一方、五月雨（さみだれ）は旧暦の五月の長雨、実際には現在の六月に降る雨で梅雨のこと。その語源は雨垂（あまだれ）、五水垂（さみだれ）など諸説がある。いずれも黒い雲から雨が降り続くことを表現している。

俳聖芭蕉の「五月雨を集めて早し最上川」は、バケツをひっくり返したように降る陽性の大粒の雨の句。

梅雨のシーズンは、日本、韓国及び中国など中緯度気候帯の中でも極東地域だけに起こる特異な降水現象である。

梅雨になると、太平洋高気圧に代表される南の暖かく湿った空気と、オホーツク海高気圧から吹き出す冷たい空気が交じり合う。その境目付近に形成される前線が、日本周辺で停滞するために曇りや雨の日が多くなる。

この前線が、日本の南海上に停滞し始める六月上旬から中旬にかけてが梅雨入り。この時期の前線は、凡そ数日周期で北上と南下を繰り返しながら、日本の南岸に近づき、しばしば西日本各地に大雨を降らせる。

こうして発達や衰弱の過程を経ながら季節が進む。やがて、太平洋高気圧が勢力を強め、前線を日本列島の北方に押し上げると梅雨が明け、盛夏が訪れるのが例年のパターン。今年は五月に発生したシベリア地方の森林火災の影響が懸念され、東日本の日本海側の地方の日照時間と雨量に要注意。

（ 気象情報システム株式会社 高 津 敏 ）